

あなたと博物館

松本市立博物館ニュース No.150 2007.5.1



たてもの野外博物館 「松本市歴史の里」

リニューアルオープンしました。



松本の自然と人との関わりを遊びながら楽しく学ぼう！

「山と自然博物館」 オープン。



もくじ

誌上博物館◇日本の時計—明治・大正・昭和—	2、3
ひとの動き	4
ガイドコーナーはんでんぼく	4



100
2007
松本市制 100周年

日本の時計 明治・大正・昭和

はじめに

一昨年、三浦市の山内英司さんからウェストミンスターチャイム付きの置時計をはじめとするさまざまな資料を寄贈いただき、昨年の時の記念日企画展でご紹介させていただきました。そのなかには、明治から昭和にかけての国産時計も数多く含まれており、整理を行なうなかで日本にも数多くの時計メーカーが存在していたことを再認識しました。加えて、昨年は遠く大分市の村上葦さんから、明治から昭和の掛時計の寄贈をいただき、この時代の時計資料が充実しました。

明治6年1月1日、旧暦から太陽暦への改暦が行なわれ、日本も西洋と同じ時刻制度を採用するようになりました。これにより、アメリカからボンボン時計の輸入が始まります。今年の時の記念日には、ボンボン時計に始まる、改暦後の日本の時計製造の歴史を、充実した収蔵資料で掛時計・置時計を中心に振り返ってみようと思います。

1 時計産業の興り

ボンボン時計とは、ゼンマイを動力として振子で速度を調節し、渦巻き状の鋼線を打って時を知らせる掛時計のことです。明治8年、早くも東京で金子元助が金元社という掛時計製造所を設立し国産時計の製造に着手していることには驚きます。しかし国産時計の製造が軌道に乗るのは、さらに10年余の歳月を要しました。

明治20年には輸入時計の数は15万台を越え、飛躍的な需要の拡大が見られます。東京、名古屋、大阪などの都市で時計製造業が興り、時計の国産が産業として根付いていきます。明治30年に関税自主権の一部回復により輸入品に対抗できるようになると、時計製造業はますます活気を帯び、明治の終わりには輸出量が輸入のそれを上回るようになります。

なかでも名古屋地方では、小規模ながら数多くの時計製造所が創業します。明治20年代こそ大阪周辺に製造所が集まっていましたが、同30年には全国17社の製造所のうち10社が、同5年には20社中18社までが愛知県にありました。東京のそれは服部時計店の工場・精工舎で、その規模は名古屋の製造所の比ではなく、国内需要のほとんどに就いていました。一方、名古屋の製造所は中国・東南アジアに販路を求め、輸出に向けていました。

明治の時計製造は、ウォーターベリー、セストーマスといったアメリカの時計会社の掛時計の模倣に始まります。写真1は昨年寄贈いただいた19世紀後半にアメリカで製造（ニューヘブン社製）された八角掛時計です。これらの明治初期に輸入された時計は、大きく

て見映えのする12インチ文字盤の八角時計が多かったようです。八角の「八」が末広りの縁起を担ぎ、直線的な輪郭が柱や梁を見せる日本建築に合ったため好まれたようです。和時計よりも安価になったとはいえ、このような時計を持つことができたのは、当時の豪商や大寺院などの特権



写真1

階級の人々に限られていたようです。明治後半になると、日本家屋に合わせ一回り小さくした八角時計も輸入されました。写真2はニューヘブン社製の10インチ文字盤の八角時計です。文字上にある鍵穴の位地から、機械は12インチと同じものを使っていることがわかります。



写真2

明治10年代以降では、四つ丸時計の輸入が目立ってきます。ダルマの形に似ていることから、通称「ダルマ型」とも呼ばれています。それまで普及していた八角時計に対して、当時の日本人の西洋趣味に合った斬新なデザインで、「ダルマ」の七転び八起きの縁起も担がれたことから普及しました。文字盤と振子窓の二つの円形窓のものは二つ丸時計、それに円形装飾を2箇所加えたものは四つ丸時計と呼ばれます。俗に「金ダルマ」と呼ばれるイングラハム社の本四つ丸時計は、昨年度の寄贈により当館所蔵数も3台となり、輸入量の多さを物語っています。写真3は、明治後期の愛知時計製造株式会社製の張四つ丸時計ですが、イングラハム社のそれ



写真3

をよく模倣しています。また昨年寄贈いただいた大阪の日本時計株式会社製の「巻物型」は、文字板や振り子窓の周囲に彫刻が施されている日本風の装飾性の強い掛時計です。

2 大正期の時計

大正期になると、東京に大きな時計製造所が相次いで創業し、名古屋・東京が二大産地で大阪には時計製造所が見られなくなります。ちなみにシチズンの前身である尚工舎もこの時期の創業です。

大正期になると、明治期の模倣製品の八角時計に加え、ヨーロッパのスタイルに倣った座敷時計が掛時計の主流となります。明治中期以降、時計の輸入はドイツ製品がアメリカ製品を上回るようになりました。昨年寄贈されたもののなかにも、機械はドイツのユンハンス社製でケースは国産という八角掛時計があります。ドイツ製の優秀な機械を輸入し、日本製の装飾に富んだケースに入れたものが出回りますが、大量の需要に応えすぐに機械の国産化が始まります。これらの装飾に富んだスリゲールも、その流れの延長上にあるといえます。写真4は俗に「ひまわり」と呼ばれる、文字盤回りの木枠に鎌倉彫の彫刻を施した掛時計で、アメリカ製の機械を国産ケースに入れたこの頃の流行品です。また、大正期に名古屋に創業した三工舎は、三面置時計や金庫時計など特徴ある置時計の製造を行い、第2次世界大戦の最中には材料にアルミを多用した掛時計を製造するなど特徴ある製造所です。



写真4

3 昭和の時計

昭和初期には、ドイツのカッコー時計を模倣し鳩時計や電気時計の製造など多様な発展を見るようになり、製造所の数も東京と名古屋を中心に30社を超えます。それまでの1軒に1台の掛時計の時代から、2台目を買入れる家も増えてきたようです。民衆を基盤にした文化が開花した時代を背景に、鶴・亀・鳥・花・竹など親しみのある動植物を取り入れた時計が出現します。

同10年代になると軍事優先の時代となり、時計は再びシンプルなデザインへと帰っていきます。そして軍需工場への転換を余儀なくされ、製造禁止に追い込まれます。

終戦を迎えると、占領下の統制の元で時計製造に復帰する会社もありました。しばらくして復興の時期を迎えると、装飾やデザインに力を注がれるようになります。写真5は国産のフクロウ時計です。目が左右に動き、正時には口を開いて「ホーホー」と時数だけ鳴きます。このようなカラクリ時計の製造は、この頃から本格化します。鳩時計の製造で有名な手塚時計の創業もこの時期です。鳴き声とともに、昭和初期の温かい民衆の心が伝わってきます。また、名古屋の名巧舎も遊び心のあるおもしろい置時計をたくさん作っています。



写真5

昭和30年代は、技術の進化を求めた時代です。掛時計は2週間、3週間そして30日と長時間持つようになり、正確性も高められていきます。その到達点が東京オリンピックの水晶発振時計の小型実用化といえます。実を追いかけたこの時期の時計には、装飾的には華美なものは見られず、単純化された美が追求されました。

おわりに

今回の企画展は掛時計と置時計の紹介ですが、改暦後の日本の機械時計の歴史には、各時代背景を如実に反映していることがお解りいただけたと思います。西洋時計の輸入とその模倣に始まり、日本の文化に合わせた意匠への対応で需要を拡大し、それを追うように時計製造の技術革新がみられました。今回の企画展では、こうした機械時計の歴史的変遷を、実際に動いている状態の時計を展示してご覧いただきます。この機会に、ぜひ百数十年前の時計の時を告げる音を聞いてみて下さい。

参考文献

- 『時計百科事典』 精密工業新聞社編 1983
- 『なつかしの掛時計』 西尾市資料館 2005

(本館／木下守・時計博物館／竹内靖長)

ひとの動き

4月1日付で、次のように職員の転入・転出等がありました。()内は所属。

☆転入 よろしくお願ひします。

係長 中島秀雄 (考古博物館長)
主査 竹内靖長 (時計博物館)
主任 山村里佳 (旧開智学校・復職)
事務員 平田明日美 (考古博物館)
嘱託 前田隆之 (歴史の里館長)
嘱託 丸山 潔 (山と自然博物館館長)
嘱託 小池史子 (本館)
嘱託 島村敬子 (旧開智学校)
臨時 守屋よし子 (本館)
臨時 柳沢葉子 (本館)
臨時 藤岡磨美子 (本館)
臨時 松林アオイ (民芸館)
臨時 手塚直美 (窪田空穂記念館)
臨時 三浦薫子 (歴史の里)

☆課内異動 職場がかわりました。

課長補佐 塩崎 裕 (考古博物館長→本館)
主査 木下 守 (時計博物館→本館)
嘱託 丸山順子 (馬場家住宅→山と自然博物館)
嘱託 中川幸子 (旧開智学校→本館)
嘱託 西村奈美 (窪田空穂記念館→馬場家住宅)

☆転出 お世話になりました。

主査 竹原 学 (本館→文化財課)
主任 福富佳織 (本館→市民課)
主任 沢柳秀利 (考古博物館→里山辺出張所)
嘱託 洞澤由里 (本館・退職)
嘱託 小林雄介 (旧開智学校・退職)
嘱託 廣田早和子 (考古博物館・退職)
臨時 吉村由美子 (本館→文化財課)
臨時 遠山裕子 (本館・退職)
臨時 清澤一善 (本館→生涯学習課)
臨時 松岡里佳 (民芸館→生涯学習課)

ガイドコーナー はてんぼく

松本市立博物館から ☎0263-32-0133

市制100周年記念特別展「ウィーン展」

会期 6/2(土)～9/2(日)
会場 市立博物館及び松本城天守閣

旧開智学校から ☎0263-32-5725

開明学校姉妹館提携20周年記念事業

特別展「姉妹館提携20年の歩みと市民交流」

日時 5/26(土)～6/24(日)
内容 開明学校所蔵の掛図や、西予市の児童による
開明学校校舎の絵画作品の展示

馬場家住宅から ☎0263-85-5070

「五月人形展」

期日 5/12(土)～6/10(日)

考古博物館から ☎0263-86-4710

ミニ展示「発掘された松本2006」

会期 4/28(土)～7/1(日)

時計博物館から ☎0263-36-0969

時の記念日企画展「日本の時計―明治・大正・昭和」

期間 5/29(火)～7/1(日)

歴史の里から ☎0263-47-4515

リニューアルオープン記念講演会

日時 5/12(土) 午後2時～3時30分
講師 佐々木 秀彦氏 (東京都歴史文化財団)
演題 「たてもの野外博物館の楽しみ方」
参加費 500円 (資料代等)
定員 50名 (要申込)

松本民芸館から ☎0263-33-1569

企画展「野山が育てた技 ざる・かご展」

会期 4/24(火)～6/3(日)

あとがき

この館ニュースの発行日が、松本市の市制施行100周年の日にあたります。松本市立博物館は、松本市より一足早く昨年100周年を迎えましたが、「あなたと博物館」創刊は昭和59年(1984)8月1日なので、今年で23年目。まだまだ若造です。(M.K.)

窪田空穂記念館から ☎0263-48-3440

「空穂茶会」

日時 5/13(日) 午前10時～午後3時
料金 1500円

窪田空穂生誕130年記念「窪田空穂を巡る座談会」

期日 6/10(日) 午前10時～午後1時
場所 Mウイング
内容 講演 「空穂と私」 武川忠一氏
座談会 「現代に生きる空穂」

資料代 500円
定員 300名

窪田空穂生誕130年記念企画展「新収蔵資料展」

期間 6/2(土)～7/1(日)
内容 未公開の窪田空穂揮毫作品等

「空穂囲碁教室」

期日 6/2(土) 午前10時～12時
対象 中学生以下の児童・生徒対象の囲碁教室
指導者 下島陽平7段、囲碁ボランティアの皆さん
定員 50名

「子ども短歌教室」

期日 6/30(土) 午前10時10分～12時
対象 中学生以下の児童・生徒及び家族対象教室
講師 三浦慎子氏
定員 30名

「短歌の教え方講座」

期日 6/30(土) 午後1時～3時
対象 教職員及び興味のある大人
講師 三浦慎子氏
定員 30名

「短歌講座 第1回」

期日 6/24(日) 午後1時40分～3時40分
講師 岩田正氏
定員 100名
受講料 1500円

あなたと博物館 No.150

発行年月日 平成19年5月1日
編集・発行 松本市立博物館
〒390-0873 松本市丸の内4番1号 Tel.0263-32-0133
URL: <http://www.city.matsumoto.nagano.jp>
e-mail: mcmuse@city.matsumoto.nagano.jp